

慢性腎臓病

慢性腎臓病は高齢者に多い

皆さん、腎臓も年をとることをご存知ですか。実は腎臓は病気がなくても20〜30歳をピークに毎年1%以下ですが、年齢とともに機能を失っていく臓器なのです。近年、慢性腎臓病という概念ができ、検尿異常、腎の形の異常、腎臓の機能が60%（推算糸球体濾過率が 0.6ml/min/1.73m^2 ）以下が3ヶ月以上続くと、この診断名がつくことになりました。実は高齢者は、この慢性腎臓病が非常に多く、北九州市の健診の結果では60歳代で5人に1人、70歳以上で4人に1人が、腎機能が60%以下であることが分かっていきます。

高齢者の慢性腎臓病の原因は何が多いのか

では、なぜ高齢者に慢性腎臓病が多いのでしょうか。加齢による腎機能減少に加え、糖尿病、高血圧症、脂質異常症、肥満、メタボリック症候群などの生活習慣病を中年期に発症し、二次的に腎臓の機能障害を起こす患者さんが多く、健診を受けたり、生活習慣病の治療を中年期から十分行っていない必要があります。また、高齢者では、泌尿器科的疾患（尿が出にくい）も多く、尿の流れが悪くなるため腎機能を失っている場合もあります。さらに、腰痛、関節痛や足が腫れるなどの症状も高齢者に多く、鎮痛剤や利尿薬を長期に服用すること、腎障害を起こす方もよく見ます。高齢者の腎臓は少し弱っていると考えたほうがよく、薬物の副作用が出やすいため注意が必要です。

済生会八幡総合病院

腎センター 部長

柳田 太平